

マ ラ ヤ 大 学 (University of Malaya)

はじめに

クアラルンプールの町から Lake Garden を右に見ながら西南へ4マイル行くと、ドームが金色にかがやくモスクが目にはいってくる。このモスクは、通称、University Mosque(正式には Masjid Al' Rahman)と呼ばれ、マラヤ大学、それに隣接するマラヤ師範学校 (Malaya Teachers College) のマレイ系学生および近在のマレイ人が金曜日の礼拝に集まるところである。このモスクを左に見ながら、マラヤ大学の正門(といっても、ただゲイトがあるだけであるが)をはいてゆくと、眼前に、650エーカーのなめらかな丘状の台地に展開するマラヤ大学のモダンな校舎がわれわれの目を捉える。左側には第1、第2学生寮 (Residential College と呼ばれる)、工学部、右側には農学部、学生会館 (Student Union) が並び、中心部に、人文学部、理学部、教育学部、図書館が集まっている。現在、建設中の医学部、付属病院、および、すでにある第3、第4学生寮はいずれも、やや離れた一角に位置している。まだわたくしがバスで大学へ通っていたころ、正門前でバスをおりてから、わたくしの経済学部の部屋まで、さんさんたる太陽の下を約30分歩いたことを思い出す。クアラルンプールの町が車なしではきわめて不便にできている(もちろんバスとタクシーはよく発達しているが)ことを痛感していたわたくしは大学へ行って、大学の施設そのものもまた車をもっていることを前提としていることに驚かされたのであった。何しろ広大な敷地に近代ビルが点在しているというのが、マラヤ大学の外観的印象である。

I 小 史

さてこのマラヤ大学は、1962年1月1日に正式にマラヤ大学と呼ばれるようになったのであるが、その前史はつぎのようなものであった。すなわち、1949年10月シンガポールに、それまでの Raffles College (1929年創設) と The King Edward VII College of Medicine (1905年創設) とを合併して、最初のマラヤ大学が創設されたのである。このマラヤ大学は、初め人文学部、理学部、医学部の3学部で発足したが、その後、法学部、工学部

が増設された。これより先、1947年の大学教育に関する Carr-Saunders 委員会 (委員長は Sir Alexander Carr-Saunders) は、将来マラヤ大学をシンガポールからジョホール・バルーへ移すことを勧告していたが、1954年にいたって、ジョホール・バルーへの移転はきわめてむずかしいという判断に到達し、これに代わって1956年に、大学教育は、シンガポールとクアラルンプールで行なうことに決定をみたのであった。この決定に従い、1957年からクアラルンプールの工業専門学校 (Technical College) の校舎をかりて、人文学部の講義が始められ、翌1958年には、工学部がシンガポールから現在マラヤ大学のある Pantai Valley に移転したのである。そして、1957年の Aitken 委員会 (Sir Robert Aitken を長とする大学教育に関する委員会) の勧告に基づき、1959年1月より、マラヤ大学はシンガポールとクアラルンプールの2カ所に設置されることになったのである (それぞれは University of Malaya in Singapore, in Kuala Lumpur と呼ばれた)。このマラヤ大学クアラルンプール分校が、1962年1月1日よりマラヤ大学と呼ばれ、これに伴いシンガポール分校は、シンガポール大学と呼ばれるようになって、今日にいたっているのである。このようにして、1957年に初めて人文学部の講義を開始したマラヤ大学は、1958年の工学部、1959年の理学部、1960年の農学部、1962年の医学部、教育学部の増設を経て、今日の6学部をもつマラヤ大学に至ったのである。そして、学生数も、1959年の320人から、1961年の1010人を経て、現在は2835人を擁するに至ったのである。

II 機構とスタッフ

マラヤ大学は、当然のことながらイギリス流の大学制度に従い、名誉学長に Abdul Rahman 首相をおき、その下に現在は Prof. R. L. Huang (化学の教授) が学長代理 (Acting Vice-Chancellor) となっている。大学の機構としては、最高の審議機関として、The Court (名誉学長、学長、王の任命する各界代表、各州代表、卒業生代表、議会代表、教育機関代表等よりなる) があり、その下に執行機関である The Council (The Court の代表、学長、大学よりの代表、王の任命する各界代表、各



マラヤ大学中央図書館

州代表等よりなり、人事、予算を処理している。現在は、総理府事務次官の Dato Abdul Jamil が委員長) がおり、その下に、大学の学術・教育問題を審議する The Senate (学長、学部長、教授代表、講師代表、図書館長よりなる) がある。

各学部 (現在はすでにふれたように 6 学部である) はさらに各学科に分かれ、それぞれの学科に学科長である教授、その下に、Senior Lecturer, Lecturer, Assistant Lecturer (その他学科によって Tutor がいる) が配置されている。現在の teaching staff は全体で 330 人前後であり、その半数は外国人教師である。Assistant Lecturer になる最低の資格は修士であって、採用後 3 年 Lecturer、その後 6~10 年で Senior Lecturer に昇進するといわれている。かれらの基本給与は Assistant Lecturer で月 800~920 マラヤ・ドル (9 万 6000~11 万 0400 円)、Lecturer で 920~1425 マラヤ・ドル、Senior Lecturer で 1350~1650 マラヤ・ドル、Professor は 1770~2130 マラヤ・ドルとなっている。このほか、官舎・住宅手当、生計費手当等があり、医療補助もあるので、日本の大学の先生の給与に比べるといかに恵まれているかがはっきりする (なおマラヤでは、大学をよい成績—Honours Degree—で出て政府にはいった場合、初任給は基本給で月額 579 マラヤ・ドルとなっている)。

大学事務局は、事務局長の下に日本の大学のようにいくつかの部局に分かれ、現在約 700 人の事務員が働いている。

図書館は、現在、15 万冊の蔵書、3100 タイトルの定期刊行物、744 席の閲覧スペースをもち、図書館長以下 90 人 (うち司書は 21 人) が働いている。

なお 1965 年度の大学予算は、1400 万 マラヤ・ドル (16

億 8000 万円) となっている。

III 学部と講義

ここの学部は 6 学部であるが、その就業年限は、人文学部が 3 年、理学部が 3~4 年、農・工学部が 4 年、医学部が 5 年、教育学部が 1~2 年となっている。また、1 カ年の講義は三つの学期に分かれており、各学期は 10 週間ずつで、各学期の間に 3 週間の休みがあり、1 月下旬から 5 月中旬までは長期の休暇となっている。

ここでは、わたくしの接触の多い人文学部について簡単に紹介してみよう。

人文学部は、現在、中国学科 (Chinese Studies)、経済学科 (Economics)、英文学科 (English)、地理学科 (Geography)、歴史学科 (History)、インド学科 (Indian Studies)、イスラム学科 (Islamic Studies)、マレイ学科 (Malay Studies) の 8 学科に分かれており、約 90 のスタッフと 1496 人の学生からなっている。このうち、受講学生数の多いのは、経済学科 540 人、歴史学科 528 人、地理学科 458 人、マレイ学科 431 人の順となっている。このうち、わたくしと関係の深い経済学科と歴史学科の講義内容を簡単に紹介してみよう。

(1) 経済学科

経済原論

Dr. S. J. Gilani, Ph. D. (London)

Mr. Lo Sum Yee, M. Sc. (London)

Mr. Yip Yat Hoong, M. A. (Malaya)

農村経済

Prof. Ungku Abdul Aziz, B. A. (Malaya)

Mr. Mokhzani, M. A. (London)

経営学

Mr. Cheng Sin Jee, M. B. A. (Br. Col.)

Mr. Tarcitus Chin, M. B. A. (Br. Col.)

会計学

Visiting Prof. B. Rollins, C. A. (Alta)

労働経済

Mr. K. S. Nijher, M. B. A. (Br. Col.)

金融、財政

Dr. Lim Chong Yah, D. Phil. (Oxford)

マレーシア経済

同上

統計学

Dr. Saw Swee Hock, Ph. D. (London)

Dr. Chan Kai Meng, Ph. D. (Belfast)

研究機関紹介

農家経営

Dr. M. C. Agarwal

国際経済

Mr. H. Johanson, M. Sc. (London)

経済思想

Mr. Lo Sum Yee

経済開発

Dr. Syed Wassem Ahmad
Dr. Lim Chong Yah

国際金融

同上

国際商品市場

同上

協同組合 Community Development

Mr. Leo Fredericks, M. A. (Br. Col.)

商法

Visiting Prof. B. Rollins

このうち Aziz 教授は、1942年から44年まで早稲田大学の専門部政経学科で学生生活を送った経験のある日本の理解者の一人であり、1961年以来経済学科の教授の職にあり、マラヤ農村の貧困の原因とその改善策ということについて、いくたの論文を発表してきた農村問題の権威である。Dr. Lim Chong Yah はマラヤの経済開発で Ph.D. をとった新進の学者で、すでにゴムについて多くの論文を発表するとともに、最近 *Asian Economic Development*, ed. by Cranley Onslow (Donald Moore Books, 1965) のなかで、マラヤの経済開発について寄稿している。また Mr. Yip Yat Hoong はスズの専門家であって、すでに多くの論文を雑誌 (*Malayan Economic Review*, *Ekonomi*) および *Malaysia* ed. by Wang Gungwu のなかで発表している。また、経済学部の大きな研究プロジェクトとしては、現在セランゴール州西北の米作地帯 Tanjong Karang の調査が Aziz 教授を中心として5カ年計画で進められており、この研究には1964年度に一橋大学の山田勇教授が客員研究員として参加しておられる。また、経済学科の雑誌としてはスタッフと学生の共同編集になる *Ekonomi* がある。

(2) 歴史学科

歴史理論

Prof. Wang Gungwu, Ph. D. (London)

マレーシア史

Dr. Cheng Siok Hwa, Ph. D. (London)

Dr. J. Kathirithamby, Ph. D. (London)

Mr. Zainal Abidin, M. A. (Q'd)

東南アジア史

Dr. J. M. Pluvier, Ph. D. (Amst.)

Dr. D. K. Bassett, Ph. D. (London)

Mr. Anthony Short, B. Litt. (Oxon.)

東アジア史

Visiting Prof. W. Franke, D. Phil. (Hamburg)

Mrs. T. Copithorne

南アジア史

Mr. Jagit Singh Sindhu, M. A. (London)

考古学

Mr. B. A. V. Peacock, M. H. (Cantab.)

ヨーロッパ史

Dr. Rosemary Quested, Ph. D. (London)

Dr. J. M. Pluvier

Mr. Anthony Short

アメリカ史

Visiting Prof. H. G. Kinloch, Ph. D. (Yale)

政治思想

Mr. Roman Dubsky, M. A. (Tronto)

国際政治

Visiting Prof. G. Maryanov, Ph. D. (Indiana)

このうち Wang Gungwu 教授は15世紀の中国史の専門家であるが、その幅広い学殖と豊かな人柄で多方面の社会的活動を行っており、マレーシアに対する loyalty の喚起を常に説いている。教授の編さんになる *Malaysia* (Donald Moore, 1964) は、シンガポール分離後においても、マレーシア研究の貴重な概説書となっている。Dr. Pluvier はオランダの学者で、最近 *Confrontation* (Oxford Univ. Press, 1965) という小冊子(オランダの立場からのアプローチ)を書き、当地で話題をよんでいる。Zainal Abidin 氏は、上記の *Malaysia* のなかで、マレーシアの国際環境について書いており、現在、マレーシアの形成過程についてまとめている。なお、歴史学科の機関誌としては、スタッフと学生の共同編集になる *Journal of the Historical Society* がある。なおマレイ学科を中心とする活動については、1964年度よりマラヤ大学に留学中の前田成文君(京大社会科学大学院)の「マラヤ大学から」(『東南アジア研究』第2巻第1号、1964年9月、115~118ページ)を参照されたい。全体としてわたくしのような印象では、マラヤ大学のスタッフは、地味な教育活動と研究活動を行なっているように感ぜられる。

IV 学 生

マラヤ大学への入学資格は、高等学校を終了して、Federation of Malaya Certificate (または Cambridge School Certificate) をとった後、2 年大学進学のための教育 (ここでは Form Six とよばれる) をうけて、Higher School Certificate をとった者に与えられる。したがって、日本のように入学試験は一般的には行なわれず、上記の H. S. C. をとった者がその進学志望と大学の収容人員とに応じて入学できることになる。またこの資格は Commonwealth の大学に共通なので、現在も、5000人以上の学生が海外 (イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ等) で留学しているといわれる。しかし、いろいろな事情で H. S. C. をとりえなかった者のためには、特別の入学試験も行なっている。大学の入学金および月謝は、入学金 5 マラヤ・ドル、保証金 50 マラヤ・ドル、月謝は医学部が 1 年 540 マラヤ・ドルのほかは、他の学部は 450 マラヤ・ドルとなっている。もちろん、理・工・農学部の場合は、若干の実験用の費用が追加される。しかし、相当多くの学生がなんらかの形で奨学金をうけており、その額は年額で 1500 マラヤ・ドル、2000 マラヤ・ドル、2500 マラヤ・ドル、3000 マラヤ・ドル等となっている。わたくしが学生から聞いた範囲では、最低 1 年に 2000 マラヤ・ドルは必要であり、2500 マラヤ・ドルが望ましいとのことであった。

現在マラヤ大学の在学学生数は、すでにふれたように 2835 人となっているが、その学部別、男女別、人種別の分類は下表のようになっている。

また学生の州別分布では、セランゴール州 804 人、ペラ州 527 人、ペナン州 407 人、ジョホール州 216 人の順となっており、後進地である東海岸州ではケランタン州 91 人、トレガンヌ州 56 人となっている。

以上の分類からみて、中国系学生は各学部にはらばっているのに対し、マレイ系学生は人文学部に集中しているのがわかる。この点について Aziz 教授に見解を求めたところ、教授はマレイ系学生の多くは農村地帯の出身者が多く、農村地帯の中学校、高等学校には理科教育の施設、教員がほとんどないことがマレイ系学生の自然科学部門への進学を妨げているとのことであった。そして教授は、日本語で、「道が開かれていない」以上、まず農村地帯の学校に理科教育への道をつくらなければならないと強調していた。またある時、わたくしが親しくしているマレイ系の学生に、どの程度、中国系の学生と交っているか、と尋ねたところ、かれは淋しそうな顔をして、それがきわめて困難なことを訴えていたことを今もよく思い起こす。

さてこれらの学生は、その 40% にあたる 1200 人が四つの学生寮にはいっており、他は、大学の近くに下宿するか、親元、親戚等の家から通学している。この学生寮は、それぞれ大学の先生が Master, Fellow の形でそこに住んで学生の指導に当たっているが、相当な自治が学生にまかせられており、学生は Junior Common Room Committee なるものをつくって、食事 (食事は Muslim と non-Muslim の二つが用意されている)、ゲーム、社会活動、図書施設、会合、保健等について自主的に活動している。その費用は、10 週間 (1 学期にあたる) で 320 マラヤ・ドルとなっている。

また学生は、全員 Students' Union に加入しており、この Union は、学生の社会、文化、スポーツ、福祉等の向上につとめているが、一般的に政治的活動は行なっていない。それは、一つにはかれらがこの国の完全な特権階級たる将来を約束されていること、一つには大学当局が学生の政治活動への参加を好んでいないことによるものと思われる。しかし、この国の代表的政治家

	中国人		マレイ人		インド人		セイロン人		ユーレシア人		その他		小計		総計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
農学部	96	6	33	1	11	1	4	—	1	—	1	—	146	8	154
人文学部	325	295	474	132	137	53	30	18	9	7	12	4	987	509	1,496
工学部	249	1	3	—	20	—	6	—	2	—	—	—	280	1	281
理学部	373	99	26	2	27	9	14	10	2	1	4	1	446	122	568
医学部	121	25	23	—	10	1	5	—	—	—	1	—	160	26	186
教育学部	39	40	11	16	13	10	5	11	1	1	1	2	70	80	150
小計	1,203	466	570	151	218	74	64	39	15	9	19	7	2,089	746	2,835
総計	1,669		721		292		103		24		26		2,835		
比率 (%)	58.87		25.43		10.30		3.63		0.85		0.92				

(注) Univ. of Malaya, Student Statistics (as at 15 July, 1965) による。

研究機関紹介

をよんで、かれらの討論を聞くことは、比較的よく行なわれている（最近では副首相の Tun Razak、大蔵大臣の Tan Siew Sin の演説があり、シンガポールの Lee Kuan Yew 首相の演説も予定されていたが中止となった）。

そのほか、学生のいろいろな社交団体、研究団体もあるが、一般的にいってあまり活発でないように見うけられる。なお、日本からの留学生としては、現在、上記の前田君と伊藤忠派遣の鳥井君の2人がいる。また、数字の示すように約25%が女子学生であるので、男女学生の関係は、きわめて自然に会話、交際を楽しんでいるように見うけられる。しかし、全体的にいってわたくしのうける印象は、ここの学生は、自分の専攻の課目については、教授の指示どおり、非常によく勉強するが、その他のトピックについてはあまり関心を示さず、大学卒業のよい資格をとることに関心が向きすぎているように感ぜられる。独立後10カ年を経過せず、その間にマレーシアの成立とシンガポールの分離、Confrontation と Communal Problem をかかえるこの多難な新興国家の将来を担うエリートであるかれらに対し、わたくしとしてはもう少し個人的栄達以上のものへの関心が強くなることを願わざるをえない。しかしこのように考えるのは、ひょっとするとわたくしたちが、あまりに nationalistic すぎるのかもしれないと思わないでもない。大学を卒業すれば、最低400マラヤ・ドル、平均600マラヤ・ドル、最高800マラヤ・ドルという基本給が保証されているかれらには、日本の多くの大学生のように、天下国家を論ずる必要はあまりないのかもしれない。しかし、依然として、わたくしには、かれらにさらに何物かを望む気持を否定することはできない。

む す び

以上の諸活動のほかに、マラヤ大学にも、スタッフを中心とする Academic Staff Association と事務系職員を中心とする General Staff Union という二つの労働組合があり、経済要求を中心に、大学当局と団交、労働協約、定期協議等を行なっていることをつけ加えておこう。

さてマラヤ大学は、現在、前にふれたように、医学部、付属病院の建設中であり、さらに第5学生寮、人文学部、図書館の増設計画も具体化されつつある。また1970年に予想される大学進学人口7000人を収容するに十分な施設とスタッフの拡充計画も進められている。

また、1966年度からは現在の Dept. of Economics は Faculty of Economics and Administration へと発展し、

経済、行政、法律、政治の各部門について講義することになっており、スタッフも現在の17人から50人までふやすことが計画されている。

このようなマラヤ大学の拡充計画を前にして、Aziz教授は、わたくしに The University なる一論文を示して（タイプ刷り17ページ）、マラヤ大学が単なる学士製造工場（B. A. grinding factory）に終わることなく、一定の学問的水準を維持し、マラヤの国民と文化に密着しつつ、マラヤの知的水準の向上と多様な文化の統一に寄与すべきことをといてくれた。教授はこの小論のなかで、大学の本質、世界における大学の歴史、大学の機能、植民地大学より国民的大学への転換の必要、大学卒業生の役割、大学の適性規模、等を論じた後、現在の時点において、ペナンその他に新たな大学をつくることの不当性を指摘して、1970年度7000人の学生をようするマラヤ大学の拡充につとめるべきことを説いている。

現在、マラヤ大学の経済学科に籍をおいて調査に従事しているわたくしとしても、マラヤ大学がそのような方向で拡大発展してゆくことを願いつつ、この紹介の筆をおくことにする。

（海外調査員 萩原宜之）

— 在クアラランブル —